

100年企業

当主の果敢な挑戦を 越後杜氏の腕が支える

青木酒造株式会社

青木酒造株式会社は1717（享保2）年、全国有数の豪雪地、新潟県魚沼市塩沢で平野屋源佐工門によって創業された。途絶えることのない雪解け水が作り出す美酒は、295年の歳月を経ていまでも多くの日本酒ファンを魅了し続けている。

塩沢で生まれた江戸時代の文人鈴木牧之^{ぼくし}は、1837（天保8）年に雪国越後の民俗習慣、伝統、産業について詳述した『北越雪譜』^{ほくえつせつ}を発行、当時のベストセラーとなった。牧之の次男弥八が青木家に養子に入り7代目を継承した縁で、青木酒造の代表格の銘酒「鶴齢」は牧之の命名と伝えられている。

塩沢の人にとって鈴木牧之は特別な存在で、青木酒造が一角にある商店街は「牧之通

り」と呼ばれ、三国街道の宿場町として栄えた塩沢宿を再現している。電柱も地中に埋め、伝統的な雪国建築を活かした見事な街並みは、2011（平成23）年5月、都市景観大賞（国土交通大臣賞）を受賞した。人づてに聞いて美しい街並みをカメラに収めようと訪れる人も多い。もちろん青木酒造も精力的に街づくりに協力してきた。

「酒造りは街づくりだと思っています。地域に貢献するというより、地域とともによくなっていくこと、そのために何かできないかというつもを考えています。私たちはお酒を売っているわけですが、酒造りをしている塩沢という街も売っていきたい。酒造組合だけではなく旅館や飲食店の力も借りていろいろ新し

いイベントを企画しています」と、平野屋12代目、青木貴史代表取締役社長は開口一番そう語った。



青木貴史代表取締役社長

「和合」の精神で新しいことに挑む

「うちの家訓といえますか、社是は『和合』です。酒を造る人、売ってくださる人、そして飲んでくださる人がいて、初めて酒が完成するわけです。若い蔵人にも和合の精神を伝えていきます」

創業300年という歴史を担う39歳の若き社長は、常に社是に立ち返り、和合の精神で、ものづくり、人づくり、食文化へのこだわり、ひいては地域文化の育成に真正面から取り組んでいる。社長の心意気を42人の従業員がしっかりと受け止め、60歳以上のベテラン4人(杜氏、蔵人、営業担当)が屋台骨を支える。

定年は60歳。制度としては60歳でも本人に働きたいという前向きな気持ちと体力があれば働き続けられる。それどころか、営業部門を強化するために他社を定年退職した人材を迎え入れている。その1人、遠藤勉企画室長(65歳)は、いまや新潟市内の営業展開の要としてけん引役を果たしている。

青木社長が25歳のときに11代目だった祖父が亡くなり、バトンを引き継ぐために母親の郷里に戻ってきた。東京生まれの東京育ち、苦労知らずの坊ちゃんが次の時代の酒造りの舵をとるため帰ってきた、ということ、周囲は少し色めきたった。その頃すでに越後杜

氏として10人ほどの蔵人の上に立っていた新保英博さん(68歳)も一抹の不安を覚えたという。

青木社長は力を込めて語った。

「酒のことはよくわからない。いま思えばその真っ白な状態がかえってよかったのかもしれない。とにかく必死でした。市場は落ち込む一方でしたから、いままでも同じことをやっていてはだめだと思いました。新保杜氏と相談してうちの特色を洗い出し、原点に返ることから始めました。新潟の酒の特徴は淡麗辛口が多いなかで、うちは米の旨味を十分に引き出した「淡麗旨口」の酒を造っていましたが、やはりこのうち独特の味を押し出していこうということになりました。私が蔵に入って初めて飲んだしぼりたての酒が本当においしかったので、これを売り出せないかと思いました。流通過程での品質管理の問

豊富な経験が実現させた販路構築

遠藤勉企画室長は前述したように、60歳を過ぎてから青木酒造の戦力として迎えられ

題もあつたので、とにかく少しでもいいから造ってほしいと、新保杜氏に頼み込んでタンク1本分造ってもらい、これを寝かせておいてから生原酒として無濾過で瓶詰めして売りました。幸いこれが好評で、いまではタンクの数も増えました。新潟県でいち早く売り出した梅酒も新しい試みでした。老舗だからこそ革新的でありたいと思つていますが、素人の言葉を真剣に聞いてくれて、一緒に新しいことに取り組もうという空気を作ってくれたのが新保杜氏であり、遠藤企画室長です。お二人がいたからいまの自分があると思つていきます」

青木社長の言葉を傍らで聞いていた新保杜氏は、「正直いって、最初は驚きましたよ。こんなもの作っても無理だろうと。しかし、新しいことを始めるために必要な設備をきちんと作ってくれましたし、これは本気だなと思いました」と笑顔を見せる。新保杜氏は青木酒造においてなくてはならない人で、その言葉は重い。青木社長は100万の味方を得た。

た。某ビールメーカーの営業マンとして培われた経験は、販路の構築はもちろん社内のシ

STEM改善や会議の方法の効率化など、みるみるうちに成果となって表れた。

「11代目には本当によくしてもらいました。仕事というより、人間同士の温かいお付き合いをさせていただき感謝しています。60過ぎから社長に声をかけてもらい、4年ほど働かせてもらっています。60歳定年退社ではなく60歳からの出発でしたが、私はこの理念である『和合』の精神に強く惹かれます。その精神に立てば、お客様との会話が楽しいものになってきます。単にお酒というモノを売るのではなく、そこに心を添える必要があります。私自身人間が大好きなので、新しい出会いがまた、自分のスキルアップにつながります」

遠藤さんが入社して新潟市場がテコ入れされた。青木酒造は9割を地元で売り上げていたが、時代の変化につれて、新潟県内あるい



遠藤勉企画室室長

は東京まで視野に置く必要があった。長い歴史のなかで、一度もリストラということをしたことがない青木酒造にとって売上の伸長は

大きな命題であったが、営業経験豊富な遠藤さんの力はいかんとなく発揮され、新潟市場は大きく広がった。

酒造り50年、後進の指導が今後の仕事

越後杜氏、新保英博さんは1960（昭和35）年に中学を卒業後、1年間農業の勉強をして17歳のとき、漠然と杜氏として生きる道を選んだ。郷里の小千谷は雪深い街で、男たちは出稼ぎをして1人前といわれるほど。生きるために新保さんも出稼ぎ人生の一步を踏み出した。このころ杜氏はあこがれの仕事で、杜氏の下で蔵人として働きながら、いつかは自分も杜氏になる日を夢見た。杜氏の方は絶対で、その一言で蔵を変えられることもある。新保さんもいくつかの蔵を転々とした。

44歳のときに大きな転機が訪れる。県内のある蔵にいたとき、青木酒造の杜氏が引退して空席になっていくことを知り、思い切って働かせてもらうことにした。新潟県で一番若い杜氏が誕生、ついに積年の夢が叶った。

「杜氏にはなれたものの、蔵人として27年も生きてきたのに自分のこれまでの日は何だったのかと落ち込みました。人にいわれ

るままに酒を造ってきただけじゃなかったかと。青木酒造に来てみると蔵もいいし、人も温かい。おいしい酒をみんなで作ろうという気概にあふれていましたから、私の勉強が始まりました。いくら体で覚えても、ちゃんと理論がわかっていないとほかの人に説明もできません。3年くらいは12時に寝たことはなかったですね。そして平成10年に社長が東京から戻ってきます。無慮過だ、梅酒だとかにかく新しい挑戦が続きました。大変でし





新保英博さん

たが毎日気力が充実していました。そうやって24造り、つまり24年間働いてきましたが、新しい酒造りの先頭に立つことがだんだんしんどくなってきました。気が付いたら68歳、この会社の最高齢になっていました。幸い、若い者はみんな頭がよく、私が言い続けてきたことはすべて吸収してくれましたから潮時だと思い、昨年、杜氏を辞めました。ありがたいことに社長より顧問として残ってくれといわれましたので、その言葉に甘え、いまは好きな時間にやってきては、いろいろ若い者と話しています」。

創業以来、毎年約2000石の酒を寒仕込みで醸し出し続けてきた青木酒造。新潟の酒が淡麗辛口と評されるのは平均精米歩合が62%と全国平均より13%も米が磨きこまれていたためだ。さらに米の旨味を追求する青木

酒造の酒は、まさに越後杜氏ならではの成せる技であった。

毎年のように日本酒ブーム到来と言われつつ、アルコールのなかで占めるシェアは6・8%に過ぎないという。この底上げをまず何とかしたいと青木社長。水球をやっていた堂堂たる体躯から日本酒に対する熱い思いが飛び出す。その姿を新保さん、遠藤さんが頼もしそうに見つめる。「和合」とはこのことか。

最後に、新保さんにこれからやりたいことをうかがった。

「出稼ぎの日々で、家のことは全部おかあちゃんに任せっきりだったので、そろそろかあちゃん孝行しようかと」。その日はまだまだ遠いのではないだろうか。

青木酒造の歩み

・1717 (享保2) 年

青木家初代の平野屋源左工門が酒造業を起す

・1837 (天保8) 年

鈴木牧之の『北越雪譜』が世に出る

・1955 (昭和30) 年

青木酒造株式会社設立 (社長 10代目青木恒治郎)

・1956 (昭和31) 年

11代目青木進、社長に就任

・1998 (平成10) 年

11代目逝去、青木貴史が12代目を引き継ぐ

・2006 (平成18) 年

青木貴史、社長に就任

